

香西氏研究

藤井公明

(一) 藤大夫章隆の一門

中御門藤中納言家成が若い頃讃岐守に任ぜられた。上香西かさい系の唐戸家系図によれば、保安元年（一一二〇）讃岐守に任ぜられ四年の任を終え京都にかえったが、その後三十二年、仁平四年（一一五四）五月廿八日死んだ。時に六十五才とある。その時家成は、綾大領貞宣の女を納れて、後の藤大夫章隆を生ませた。これが讃岐藤家の始祖であった。この後家成の子で、中納言經忠の女の腹に生まれた、後の正二位大納言隆季は、保元四年（一一五九）十三才の時讃岐守に任ぜられ、ついで、弟の正二位大納言成親は年九才の時讃岐守に任ぜられている。これらは皆章隆よりは年少で、遥授の官だから皆任国には、姿を見せなかった。そしてこんな時には、地方の豪族が在庁して職務を代行したのである。

保元の頃は、綾大夫高遠が執務していて、崇徳上皇を御むかえしている。大夫とは五位の大領で、国守が四位であるから、在庁の役人としては最上位で、国守不在の時には、一部それを代行したのである。

章隆が、いつから藤大夫と呼ばれるようになったかは不明であるが、

中納言家成の庶子というので、多度大領佐伯頼光の女を娶り、間もなく綾の大領となり、ついで藤大夫と呼ばれるようになったのであろう。現在も綾南町畑田に広大な屋敷跡が残っている。

唐戸家系図によれば、仁安二年（一一六七）三月廿日に死んでいる。時に四十六才。法名大有となっている。

その子の資高は、羽床荘の荘司となり、詫間左衛門頼正の女を妻として、親隆、有高、重高、資光を生んでいる。荘司とは、はじめ下司とも呼ばれ、現地にいて荘園領主に代って、年貢夫役などを指図し、領主からは一定の職務給をもらっていた。それが平安末期になると地方武士となり、次第に勢力を固めてゆくようになったのである。

資高の長男親隆は、上京して周防守となり、祖父家成の三男で、時の人として栄えていた大納言成親の執政官となった。

次男有高は新大夫と称し大野氏の祖となり、三男重高は藤大夫と称し、羽床氏の祖となった。

四男資光は、新居藤大夫と号し、綾大領となり、河野左京大夫良広の女を妻として、資幸・信資・資村を生んだ。

注目すべきことは、資高の子三人が、皆大夫と呼ばれていることである。これは当時国守が遥授の官となってしまうため、在庁の政務が地方の大夫にまかせられたことを示しているわけであるが、藤氏一族が地方の武士集団として勢力を伸ばしたことも見のがせない。

(二) 新居藤大夫資光の活躍

平家物語を読むと鹿の谷事件をめぐってさまざまな話がある。まずその頃の叙位、除目は、院や天皇のはからいでもなく、摂政関白のとりなしでもなく、平清盛の思いのままになってしまったとなげいている。承安元年（一一七一）の頃の話である。

その時入道相国の長男重盛が左大将になり、次男の宗盛が多く先輩を超えて右大将になったことから、新大納言藤原成親が、反平家の中心人物になってしまったと書いてある。

東山の鹿の谷に、法勝寺の執行俊寛僧都の山荘があった。そこに後白河法皇の命をうけて、西光法師の計画で、反平家の人々が集まったのである。大納言成親を筆頭に、近江の中将入道蓮浄、俊寛僧都、山城の守基兼、式部の大輔雅維、平判官康頼、宗判官信房、新平判官資行、武士では多田の蔵人行綱をはじめとして、北面の武士が参加することになっていた。当時後白河法皇は、北面の武士を増加しつつあったので、それがクーデターの中心兵力になるはずであった。（鹿の谷の事件）

そしてこの事件が発覚したのは、多田蔵人行綱が密告したことからで、事件の手入れは治承元年（一一七七）六月一日から始まる。まず西光が捕えられ詰問されるが、その時の清盛に対する捨せりふの中に注目すべき片言がある。それは清盛がまだ十四、五才の頃は、いつも

故中御門中納言家成卿の家に出入りして、やっと世渡りしていた時代があったではないか、それが何だ、分を越えて威張りくさってとあざ笑っていることである。（西光が切られる事）。

また成親が清盛の屋敷にとらえられ拷問を受けた後別室になげ込まれた所へ、重盛がかけつけ、成親の哀願に答えるとともに、清盛に忠告する言葉の中に、「重盛かの大納言が妹に相具して候、維盛また婿なり」とあるように、成親の娘が維盛の妻となっていたのである。だから重盛は成親を殺してはならぬといさめるのである。（小松教訓の事）。

また成親の子丹波の少将成経は、平教盛の娘が妻になっていたのだから、教盛の必死の命請いがあった。（少将請い受の事）。

このように見ると、中御門家と平家との因縁は、複雑なからまりをもっていたのである。過去においてはききてもきれぬつながりがあったのである。そんな理由で成親を即坐に斬罪にすることもできず、吉備の中山の山寺に流した後、八月十九日、岸から突き落として暗殺した。また少将成経、俊寛、康頼の三人は鬼界が島に流された。（新大納言死去の事）

この中御門大納言処刑の噂は、当然讃岐の藤氏一門にも伝わってきた。それに彼らの長兄周防守親高は、成親の執政官だったので、すでに殺されていたから、当然讃岐の藤氏一門の清盛憎悪の感情は、内心で燃えていたのである。

治承四年（一一八〇）以仁王の令旨を受けて諸国の源氏が蜂起した。また吾妻鏡によれば、養和元年（一一八二）閏二月十二日の条に、河野通清が、平氏に反して、軍兵をひきいて、伊予の国をさしおさえた」と書いてある。藤大夫資光の妻は河野の一族だったので、この知らせはずでに伝わっていたはずである。

吾妻鏡元暦元年（一一八四）九月十九日の条に、讃岐国御家人らに下した頼朝の御判のある文がのっている。それによると、橘次公業の下知に従って御方に参り、平家追討に参加した御家人たちの交名折紙をたしかに見た。今後とも忠義をつくしてくれという前文があった。次の人名があげられている。

藤大夫資光 同子息新大夫資重
同子息新大夫能員 藤次郎大夫重次
同舎弟六郎長資 藤新大夫光高
三野三郎大夫高包 橘大夫盛資
三野首領盛資 仲行事貞房
三野九郎有忠 三野首領太郎
同次郎 大麻藤太家人

以上が藤大夫資光を筆頭にした讃岐国御家人の名であった。これを平家物語の（六箇度合戦の事）の章に照合すると、

平家が一の谷に引き揚げた後は、四国の者どもが一向に従わなくなった。

中でも阿波、讃岐の在庁の者たちは、源氏に心を通わすようになり、伊予の河野ともしめし合わせ、兵船十余艘で、備前の国下津井の教盛・通盛・教経らの陣におそいかかったが、能登守らに手痛く攻めたてられて、淡路の福良の泊まで逃げた。しかし平家はさらに淡路まで追いかけてそれをも攻め破った。そこで新居資光ら前記の讃岐勢は、淡路から京都に上り、後白河法皇の御所を守護し、さらにこれを鎌倉に報告した結果が、前記吾妻鏡の元暦元年九月の記となったのである。

唐戸家系図によれば資光は承久三年（一二二二）四月三日に死んで、時に年六十一才、法名有典とあるから、元暦元年には二十四才の青年武士であったことになる。さらに、平家物語の（那須の与一の事）の章を見ると、

「頃ば元暦二年二月十九日頃のことだが、阿波讃岐に平家を背いて源氏を待つていた兵たちが、あちこちから十四、五騎二十騎とうちつれやうてきたので、源氏は間もなく三百余騎になった。一行もいたと書いてあるから、義経よりも一足早く讃岐に帰ってひそんでいたのであろう。」

そして、さらに、「南海通記」には、戦後の恩賞として、

讃岐国では、藤家一族六十三人は関東方について、平家と数度合戦し、軍忠があつたので、本領を安堵せしめ、西方七郡の守護職を賜り、鎌倉の橋次公業は関東の御目代として、三木郡に据え置かれ、東方四郡の守護人となつた。

と書いてあるが、後世に書かれたこの「南海通記」の記事は真偽不明の点も多いように思われる。

石井進氏の研究（日本の歴史7鎌倉幕府）では、「地頭」にも地域的な違いがあることを指摘している。東国では、従来の在庁官人や荘園の下司が、すべて地頭と呼ばれ、日本国総地頭（頼朝）の配下に組み込まれたが、西国では一部を除いて、大部分の在庁官人は従来のとおり郡司・郷司であり、また従来どおり荘園の下司の大部分は下司のままで地位を確保したのである。つまり西国では従来の行政がそのままに近い制度で続行したと言うのである。

ただここで確認しておきたいことは、新居大夫資光がこの時以来御家人藤氏の筆頭人として重きをなすようになったことである。

(三) 藤左近将監香西資村

「南海通記」の讃州藤家系図には、八二〇年二月十二日の条に、前章四十一（一八〇）以下に王の命を受けず藤園の地力は轉讓す。

資幸 藤大夫福家氏祖
資光 — 信資 次郎左衛門西隆寺祖

資村 香西左近将監

前章にかいたように新居大夫資光が、承久三年四月三日に死んだとすれば、兄の資幸と信資は早く別居して、資村のみが父と新居に同居していたことになる。そして長男資幸はすでに在庁役人として藤太夫と呼ばれたこともあつたことになる。

そして注目すべきことは、承久三年（一二二二）の兵乱の時に、関東に味方して恩賞にあずかたはずの資村が、生涯左近将監に終つたことである。将監は近衛府の四等官の判官で従六位相当官である。彼の父も長兄も、すでに元暦の頃大夫（五位相当）と呼ばれていたのになぜだろうか。

これは彼の生きた時代が、鎌倉と京都の微妙な勢力抗争の時代だったからではあるまいか。武力は鎌倉方が握り、位階は京都側に属した時代である。唐戸家系図によれば、資村は嘉禎元年（一二三五）七月七日に死んだ。時に五十三才、法名了原となっている。承久三年には父資光六十一才、三男の資村が三十九才であつたことになる。

前章にも書いたように、東国の御家人たちは、空しい位階よりもむしろ一生懸命の土地を求めたからであろうか、荘園の下司（荘司）は、

皆地頭となり、荘園領主をしのぐ実質上の支配者となった。それに反して、西国では、荘園領主としての権力は、しばらくそのままに、皇族・貴族・社寺の手に残っていたようである。

後鳥羽上皇は王政復古の理想をもたれ、北面の武士のほかに西面の武士をおかれ、またひそかに寺院の勢力との提携をもくわだてられた。ともに幕府の武家政治によって荘園制度が破壊されようとしていたからである。

頼朝の死後、有力な武将たちがあいついで北条氏に倒され、承久元年（一二一九）実朝が殺害された時、源氏の血統は絶え、北条義時が実権を握ってしまった。

承久三年五月、上皇は、ついに義時追討の院宣を、北条に不平を持つ諸国の武士たちに下したのであった。

しかし、東国から北条泰時を大将とした鎌倉勢が攻めのぼった時、上皇方の六万余騎がもろくも敗れてしまったことは、増鏡の（新島もりの）章にも語られている。

伊予の国の有力な御家人であった、河野通信、その子通政、その孫通秀らは、早くから京都に上って西面の武士となり、院の庁にも出仕していた。「承久記」を見ると、

伊予国の河野四郎入道（通信）は、四月二十八日高陽院殿にかけつけた有力武士の一人であった。そして六月九日には五百余騎で広瀬へ向ったが

敗北した。そして五月十日新羅に、
と書いてある。そしてこの時、河野に誘われて、羽床兵衛藤大夫重基（羽床重助二男）と柞田大夫貞重（羽床庶流）が参加している。これは讃岐藤氏の一部にすぎないが、二人はすでに大夫と稱しているから、早くから、西面か北面かに同候して、朝廷から大夫（五位）の称号を許されていたのかも知れない。

しかし、新居の藤左衛門尉資村は、その時彼らに同調せずして、藤氏をまとめて関東に同候し、その恩賞として、阿野・香河二郡の地頭職に任せられ、笠居の佐科に地頭屋敷を造り、香西資村と稱するようになったのである。

藤氏一族の大部分をまとめて盲動させなかった一部の力は、存命中の父資光の命令にあったかも知れない。しかしもう一つの理由は、後彼が地頭屋敷を造った笠居郷は、九条道家の荘園であったから、その時彼は、すでにその荘園の荘司となり、九条関白家とは深い関係をもっていたのではないだろうかと考えられる。九条道家は、二才で下向した鎌倉將軍頼朝の父だったので、今度の事件には反対で、上皇側でも、九条道家や西園寺公経らは謀議に参加させなかった。そんな気配は、すでに荘司だった資村にも伝わり、彼はひそかに幼い鎌倉將軍に対する忠誠を誓って自重していたのかも知れない。

その結果、彼が綾・香川二郡の地頭職の地位を得たとすれば、関東

の御家人と同じ実利を得たことになる。大夫にならなくても郡の地頭として、在庁の役人として、国政に参与したはずである。

ただしこの頃から、讃岐国に守護がおかれ、その守護は鎌倉の豪族三浦義村の一族だったかも知れない。

資村が歿した嘉禎元年（一二三五）から約十年後、吾妻鏡に、寛元四年（一二四六）三月十八日の条に、讃岐の国の御家人藤左衛門尉

が海賊を捕えてつれてきた事。彼国の守護人三浦能登前司光村の代官が、注申してきたので、六波羅からそれをつりついで幕府に知らせてきた。そ

れで協議の結果、感心なことだと將軍家もおほめになっていたぞと、本人たちにも伝えておくと六波羅に仰せになった。

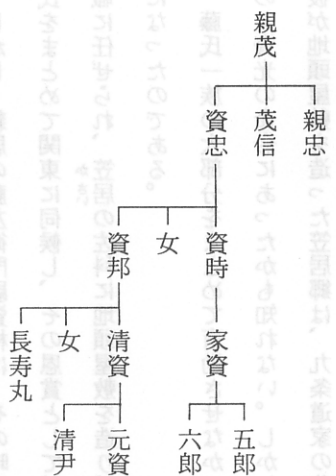
とある。

これは二代忠資の時代で、その時彼は三十九才であった。そして讃岐の守護は三浦義村の二男光村であった。光村はその時評定衆の一人で鎌倉に住んでいたのです。その代官が国府にのり込んで政務をとっていたのであろう。当然藤左衛門尉をはじめ、讃岐の御家人たちは彼に協力していたようである。こうして守護がおかれるようになると、以後国守は完全に空職になってしまったわけである。

（四）細川定禅と香西氏

「太平記」の（諸国の朝敵蜂起の事）の章でみると、建武二年（一三三五）十一月二十六日、細川定禅が、讃岐の鷺田荘で兵をあげた時、詫間、香西がこれを助けて、古高松の高松頼重を攻めた。その時讃岐の他氏もこれを助けたので頼重は都に逃げ帰った。かくて讃岐・阿波の両国がたちまち定禅に属したので、その勢三千余騎になったと書いている。

「香西記」の略系譜を見ると、



親茂の注記には、

左衛門尉。後醍醐帝御方人なり。後足利尊氏に属して武功を立つ。とある。つまりこの親茂の時から細川定禅に属して行動するようになったのである。

「太平記」の（將軍御進発・大渡山崎等合戦の事）の章によると、その後定禅の軍は、建武三年（一三三六）正月七日播磨につき、さら

に、芥川・櫻井の宿と東上して京都を攻めたが、その時定禪の軍は二万余騎となっていた。さらに淀の大明神前にきた時には、六万余騎になつて官軍をせめたので、新田義貞は、主上を守つて東坂本に退いた。

建武三年は二月改元になつたが、その延元元年（一三三六）二月、兵糧の関係から、尊氏の本隊は九州に、細川勢は四国に引きあげた。

しかし四月三日尊氏の九州勢が再東上するようになったので、四国の細川勢は軍船五百余艘で来り会した。「太平記」の（兵庫海陸寄手の事）。（経島合戦の事）。（正成兄弟討死の事）。（新田殿湊河合戦の事）などの章を要約すると、

四国勢は、紺部の浜（神戸）から上陸しようとしたが、はばまれたので更に東上して官軍の後方にまわろうとしたため、敵もそれにつれて東に移動した。その時九州中国勢の尊氏の本隊が和田のみ崎に上陸して、新田義貞の本隊と楠木正成の支隊を分断してしまふことになつた。その結果退路をたたれた正成兄弟は討死するようになり、義貞軍は丹波路さして逃げ帰つたと書いてある。

(五) 細川頼春と香西氏

「南海通記」の（細川頼春任四国大将軍記）の章をみると、

延元二年（一三三七）春、帝が京都を出させたまうて吉野に潜幸なされたので、今後は尊氏卿が京都にいて、天下の成敗をされるようになった。そんなわけで細川刑部大輔頼春が、尊氏の命で、今後は細川定禪に代つて、四国の兵衆を統撰すべしということになつたので、頼春は四国の大軍をひきつれて阿波の国に下向した。

とあるが、この時から四国は頼春の支配下におかれるようになったのである。

阿波では守護小笠原阿波守。坂東・坂西・海部・秋月の諸将。讃岐では、橘家・三木・寒川の氏族。藤家の詫間・香西の氏族。伊予の河野・宇都宮。土佐の郡司安岐・本山・吉良・大比羅。其外高岡、幡多の兵将。これらは皆將軍家の命を受けて、頼春に属した。

しかし予州の土居・得能・合田・二宮・多田・金谷。阿波の大西。讃岐の羽床は分際は小身であったが、王命を奉じて南方の官軍に応じていたと書いてある。

さらに「南海通記」の（伊予国千町が原合戦記）の章を要約すると、
暦応元年（一三三八）閏七月義貞が戦死。同二年（一三三九）八月十六日後醍醐天皇崩御。後村上天皇が即位された。

同三年（一三四〇）新田義助が、四国西国の大将軍となつて伊予国にやつてきたので、伊予の官方は力を得て、得能弾正少弼を大将として、河野四郎通朝の居城河江におしよせたので。河野は退参した。河

野は將軍に伊予の守護職に補せられていたのである。

河江の城が落ちたので、阿波の大西、讃岐の羽床がしめし合わせて、国内の同志を求めた所、讃岐の十河十郎・三谷八郎・神内右兵衛尉が宮方だったので、新田義助は讃岐に攻め入ろうとした。が、不幸にして義助は病いのために死んでしまったので、宮方はがっかりした。

この話をきいて阿波にいた細川頼春は、阿波・淡路・讃岐の兵七千余騎をひきいて、伊予に向った。阿波の大西、讃岐の羽床は、累代の大剛の者で、宮方についていたが、今度頼春は礼を厚うして將軍方へ招き、これに先陣を頼んで伊予におしよせ、土居三郎がこもっていた河江城を攻めた。

この時金谷修理大夫経氏は、精兵三百余騎をひきいて千町が原にうって出て、頼春の大軍を相手にして大活躍をし、十七騎になるまで戦って、敵陣をかけ抜け、船にとび乗って備後を指して落ちて行った。また大館左馬助がこもっていた世田城を攻めたが、九月三日の暁、左馬助は城門を開いて打って出て討死した。岡部出羽守一族も皆戦死したので頼春は伊予国中の宮方を攻めなびけ、河野の本領を還附して、阿波にひきあげたとある。

なおこの戦況については、太平記には（義助朝臣病死の事・附頼軍の事）の章にもくわしく書かれている。そしてこの千町が原に参戦したのは、「香西記」の香西系図注記によ

れば、香西資忠とその子資時であった。

ついで太平記の（慧源禅巷南方合体の事附漢楚合戦の事）。（宮方京攻めの事）。（將軍上洛の事附阿保秋山河原軍の事）。（將軍親子御退失の事附井原石窟の事）。（越後守石見より引き返す事）。（光明寺合戦の事附師直怪異の事）。（師直師泰出家の事附薬師寺遁世の事）。（師直以下誅せらるる事附仁義血気勇者の事）。（將軍御兄弟和睦の事附天狗勢汰への事）などを見ると、この間天下の武將が、尊氏直義両方に別れて勝敗をくり返すことが詳しく書かれている。

観応元年（一三五〇）十二月、尊氏と直義が不和になり直義が南朝に帰順した。しかし翌二年二月には両者が和ぼくし、二人の仲違いの原因になっていた、二十余年間の権力者執事高師直・師泰兄弟が殺されて落着いた。

これで平和になったはずだったが、尊氏側の武將仁木・細川・土岐・佐々木らと、直義側の武將石堂・上杉・桃井らとの間の疑心暗鬼はとけなかった。

そこで尊氏側の諸將は、皆それぞれの分国に帰って兵力を養うことになったので、細川刑部大輔頼春も四国に帰ってきた。

七月三十日直義方の石堂、桃井らも不安になったので、直義をすずめて関東に下ることになった。

八月十八日には、尊氏と義詮が帰順して、直義追討の宣旨をうけ、

大軍をつれて東国に下ることになり、京都の留守は義詮が守ることになった。（「太平記」直義追罰の官旨御使の事附鴨社鳴動の事）

「太平記」の（吉野殿相公羽林と御和睦の事附住吉の松折る、事）

によれば、当時義詮を助けて都を守っていたのは、細川刑部大輔頼春の阿波・讃岐の兵八千人にすぎなかった。ところが観応三年（一二三二）二月南軍の和田桶以下二万余人が攻めよせてきたので、細川頼春は手兵三百余騎をひきいて大軍に当たり戦死したことになる。

「南海通記」では、このとき、

讃岐国ノ住人香西左衛門次郎家資二千余ヲ以テ先鋒ヲナス、敵大兵ニシテ力相当ラズ鳥羽繩手ニ於テ戦死ス。……………

細川頼春モ此ニ於テ戦死シ玉フ、天下ノ武士是ヲ惜ズト云フコト

ナシ。

とある。

この香西家資は資時の子で、悲劇の幼児五郎・六郎の父であった。

「香西史」では、正平七年（一二三二）二月鳥羽にて戦死す。時に年五十四、法名休意となっている。

観応三年（一二三二）二月、十代香西家資が戦死した時、その子五

郎が幼少で家をつぐことになった。その時一族家臣たちがひそかに会合して、今は天下乱世の時であるから、叔父香西七郎を陣代として家を守るべきであると計って、母詫間氏に告げた。しかし彼女は、五郎の父左衛門殿は、公儀のために戦死したのであるから、五郎を立てて大将となし守るべきだと主張してゆずらなかった。

その後五郎が菩提寺北谷坊で、九月十三夜の観月の宴をもよおした時、その晩何者かが五郎を暗殺した。母は怒り、怨霊となって彼らにたたらうと言って、狂乱して自殺した。（一説では池に投身した）。その時三才の弟六郎は、乳母がだいて母の里詫間家に逃げ帰った。後に大見の六郎と稱した。そしてこの時の陰謀の中心人物だった泉房右近太郎と藤井八郎は間もなく狂死した。またこれに同調していた者が、あいついで死んだので、人々は恐れをなして、

山端ニ社壇ヲ造リ、貴布祢大明神ト謚ヲナシ、毎月ノ祭祀ヲナシ拜祀怠ラザリシカバ、是ヨリ靈ノ崇リモ次第ニ和同ス。同所寺屋敷ノ後ニ先祖ノ御靈屋アリ、此所ニ五郎ノ廟ヲ築キ靈室ヲ作テ、渴仰スルコト先祖ノ靈ヨリ超タリ。御靈室、屋敷、貴布祢ノ名バカリハ今ニ存セリ。（……点筆者）

とある。

(六) 山端村貴布禰神社記

「南海通記」の（香河郡山端村貴布祢神社記）の大意を書くこと、

しかし……点をつけた原文は何を意味しているのであろうか。

「五郎の御霊室も、北谷坊の寺屋敷も、貴布祢大明神も、その話だけは今に残っているが、その旧跡は消えてしまった。」と言う文面である。

なお梶原藍水の「古今讃岐名勝図絵」は、この「南海通記」や「讃州府誌」などを参照にしたためか、

貴船明神 佐料城辺にあり、香西五郎が母堂即ち家資夫人の霊を祀る處なり今廃す。傍に貴船池あり。

と書いてある。

また、福家惣衛氏の「上笠居村史」は、

母堂の霊を貴布祢大明神に合祀して毎月の祭祀を絶たず、先祖の霊屋の後に五郎の廟を築いて鄭重に祭儀を行う。(……点筆者)

と書いて、その後のことにはふれていない。

しかし……点の貴布祢大明神は、京都の貴船明神の分社を、旧貴船池の畔に早くから祭っていて、その池を貴船池と呼んでいたものと考えなければならぬだろう。

そもそも貴船大明神は、京の賀茂川の上流貴船山に祭られていた神で、「たかおかみの神」とよばれ、雨乞い、雨止めの神で、平安時代から信仰されていて、中世の頃からその祭日は、四月一日と十一月一日であった。

香西氏も、北谷(萩の谷)の水を留めて、庭園風の小池を造り、そ

の傍に、水の神貴船明神を勧請して、その小池を貴船池と呼んでいたらしい。そしてそこは佐料城の西の小高い山すそにあったので、京都風の庭園が造られ、城主の別荘地となり、観月・観桜・観楓の場ともなったのであろう。

またこの景勝の地の一隅には、歴代の墓も作られ、それを管理していたのが白雲山北谷坊であろう。白雲山は城西の山の意、北谷坊は、南の地獄谷に対して北の萩の谷のほりにある僧庵を意味していた。

五郎の霊屋もその寺屋敷に作られ、狂乱した五郎の母が、わが子の墓を離れかね、そのまま貴船池に入水自殺したので、人々が彼女の意中を汲みとって、貴船明神に合祀して、祠も新に作り、貴船大明神とあがめ、彼女の毎月の忌日には祭祀をおこなわず続けたと解釈すれば古伝説が理解されるようである(忌日旧曆九月十八日)。

その後寛永十九年(一六四二)五月、松平頼重が入城した。「香西記」によると、

正保二年(一六四五)春から秋に至るまで雨が降らなかったので、国内に新池を築くことになった。香西でも四十九も作った。これは讃岐大日記に書いてある。

これは頼重の大英断で、借金をしてでも、この大事業を断行したのである。

しかしこの時現在の貴船新池が作られたわけであるが、そのために、昔の旧貴船池を中心とした庭園式景勝の地は破壊されたのである。そしてその時、御霊堂（五郎の墓）も、屋敷（北谷坊の寺屋敷）も、水辺にあった貴布祢神社も、すべて消失して、その名ばかりが今に残っている。これが「南海通記」の記であろうか。

しかしこの部分の「原文」を成資はいづごろどこでかいたのであるうか。白雲山北谷坊が、現在の養福寺の地に、堂々たる寺院として、再建されたのは果していづごろだろうか。「南海通記」には養福寺建立の話も、五郎の墓の移転も、現在の貴船社も書かれていない。

香西成資が、高松で、「南海通記」の原文を書きあげたのは、寛文三年（一六六三）三月、三十三才の時であった。これより先、彼は早くから高松に出て、藩士小幡勘兵衛の塾生となり、兵法の学問をしていた。彼が「南海通記」を書いたのもその学問の資料と考えた一面もある。そしてこの大原稿をひっさげて、彼は福岡藩主に聘せられるままに福岡藩に仕えたのである。

寛文二年（一六六二）養福寺は、寺号官許を得ているから、それより数年前貴船新池の築造が始まったのであろうが、観応三年（一三五二）からはすでに二百余年の年月が流れ、天正十三年（一五八五）香西氏が滅亡してからでも、七十余年の月日がたっていたから、五郎の霊屋も貴船明神もすでに風化して見るかげもなく、北谷坊も、大庄屋

植松家をはじめ香西家遺臣のバックアップによって、何とか再建を図っていた時であろうか。

とにかく成資の貴布祢神社記の原文が書かれたのは養福寺再建の寛文二年以前と考えなければならぬだろう。

(七) 丹波守護代香西常建入道

「勝賀城跡第二次調査報告書」の中に、「香西氏略年譜（未定稿）」がある。これは木原溥幸氏が、小川信、棚橋光男、今合明、桃裕行などの諸氏の研究をも参考にして作ったとあるように、さまざまな新問題を投げかけている未完の年譜である。

丹波守護代香西常建入道と呼ばれる大人物が香西一族にいたということは、下香西系の「南海通記」にも、上香西系の「香西記」にも書き残されていないというのが事実である。つまり主流派（城主側）の記録が抹殺してきた人物である。それは彼が香西家傍流の人物だったからだろうか。

では、この傍流の常建入道を抜てきしたのは誰だろうか。それはおそらく常久入道細川頼之だっただろう。頼之が出家して常久と名のり宇多津の館に住むようになったのは、天授五年（一三七九）閏四月と

人生五十愧無功

花木春過夏已中

満室蒼蠅掃難尽

去尋禪榻臥清風

人生五十と言うが何の功績も残さなかった。花や木も春がすぎて、

今はもう夏の半ばになっている。うるさい蠅のような人間がうよう

よしていいやな世の中になった。早く田舎の禅寺にでも帰って、

のんびりと休みたい。という意味であろうか。

この詩を書き、出家して、常久と名乗り讃岐に帰ったと言う。時に

五十一才であった。しかし万一のことを考え、阿波讃岐に散らばる細

川一族の結束を固めたとも言う。

当然阿讃の豪族から選ばれた壮士を集めて宇多津館の頼之親衛隊も

作られたらうと想像される。そしてその時香西氏がさし出した壮士

が常建ではなかったらうか。もちろん彼はまだ出家していなかった

ので太郎とか次郎とか呼ぶ俗稱があったはずだが、しばらく入道を省

略したままの常建をその俗稱の代用にしよう。

「康富記」応永二十九年（一四二二）六月八日の条に、

細川右京大夫内の者、香西死去云々、丹波国守護代なり。六十二云々。

とあるから、天授五年には十八才の青年であった。いつから常建が宇

頼之上洛の明德二年には、三十一才の壮年武士であり、親衛隊の少壮

隊長格になっていたはずである。これはあくまでも想像だが、頼之が、

香西氏傍流の常建を発見するとすれば、これに近い仮説が是非とも必

要だろう。

「蔭涼軒日録」の明応二年（一四九三）六月十八日の条に、

「讃岐は十三郡あり、うち六郡は香川氏が領し、七郡は安富氏が領有して

いる。香川氏配下の国衆は小分限者ばかりであるが、よく香川氏に従っ

ている。安富氏配下の七郡の国衆は大分限者が多く、なかでも香西氏が首党

であり、各々好むところを行って安富氏の命に従う者はほとんどない。小

豆島及び備中の国衛の一部も安富氏の管するところである。」

とされる。讃岐の国に守護代をおくようになったのは、おそらく細川頼之が明

徳二年（一三九一）四月三日、將軍義満の要請によって再度上洛する

ようになった時からであろう。

明德元年（一三九〇）に山名宮内少輔時熙と同右馬頭氏幸はしばし

ば將軍の命に従わずその上反逆までも企んでいたと言う理由で、將軍

義満は、陸奥守氏清と同播磨守満幸に命じて、これを討伐させようと

した。しかしこれは強大化していた山名の勢力を二分しようとする計

画でもあったので、そのためには、他の強力なる兵力を必要とした。

そこで幕府は四国に隠せいでいた頼之の力を借りなければならな

ったのである。頼之は四国の軍兵二万余人を率いて中国に向かい、山名の領国に攻め入って各所の城を攻めた。時熙と氏幸は城を抜けて行方をくらましてしまったのでそれにうながされて時熙らの残党を打ち破りながら、氏清・満幸も上洛してきた。頼之は山名の反乱が鎮まったので、兵をまとめてはやばよと四国に引揚げてしまった。結果山名の強大な力は、氏清・満幸の二人にまとめられたことになったが、將軍周辺の不安はまだ去らなかった。頼之の再上洛が要請されたのは、そのような状況下であった。

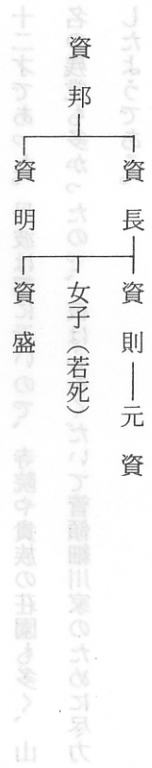
はたしてその年十二月には山名氏清らの反乱があり、頼之は陣頭に立ってこれを平定した。その功により翌三年正月細川家に、今まで山名の所領だった丹波の国を賜わったのである。この丹波の国は長年山名の支配した国だったので、各地にまだその残党も残っていた。その丹波に頼之の命によって、新守護代として派遣されたのが香西常建であったらう。(三八〇) 武長廿五日、將軍御前より香西常建の旨を

そして間もなく、明德三年三月二日花の頃、常久入道頼之は散る花のように死んでいった。常建がその頼之をしたって出家し、常建入道と稱するようになったのはおそらくこの時からであろう。常建入道十二才であった。丹波は都に近いので、寺院や貴族の莊園も多く、山名の残党も多かったので、彼は心をくわいて管領細川家のために尽力したようである。

さて先に引用した「蔭涼軒日録」の東讃の守護代安富氏と香西氏をめぐむる問題であるが、あれは、明德二年(一三九一)頼之が起用してからすでに百年の月日が流れて事実安富氏の力は衰微に向いつつあったのである。しかし頼之が安富を起用した頃は、安富は歴代和歌や連歌の名人が続出していたから、文治派としてその才能を評価したのではないだろうか。(一四〇六)

それに対して香西家の方は、その時人材がいなかったのかも知れない。「香西史」(昭和五年香西町刊)は、岡田唯吉氏の研究であるが、十二代清資について、(三十四年) (四一)

清資ハ資邦ノ長男ニシテ又七郎ト稱シ、後左近將監ト号ス。唐戸家ノ系図ニヨレバ、資長トアリテ豊後守ト云ヒ、細川頼之ニ属シ数度ノ戦功アリ。元中八年(北朝明德二年)十一月八日卒ス。時ニ五十八法名意解トアリ。二子アリ、次子清尹ハ美作守ト号シ、香西備前次郎ノ養子トナル。清資四世ノ孫ニ清長アリ、佳清ノ弟千虎丸ノ傳トナル。(三十八) 永享二十五年六月十一日、資長(元中八年)とある。これは、その系図を探して、担紙の唐渡家の系図を見せてもらった。これは岡田氏が見たのとちがった系図かも知れないが、紹介しておこう。



注記によれば、

×資邦 七郎。資家は鳥羽にて戦死。その子五郎また殺さる。ここに

おいて大將軍足利尊氏命じて、兄資家の後をつがしむ。延文五年

丑年(一三六〇)九月廿五日、南軍夜に乗じて將軍義詮の營を襲

う。資邦よくこれを禦いで死す。もって兄弟皆死す。時に五十一

才。法名乘蓮信士。

×資長 豊後守という。細川頼之に属し、しばしば戦功あり。明德二

年(一三九一)十一月八日卒す。時に年五十八才。法名意解。山

×資明 豊後守という。

×資則 越後守という。細川讚岐詮春に属し功あり。明德十三丁未年

六月一日卒す。時に四十九才、法名龍雲。

×資盛 五藤石見守。一城を築いて五藤山に世々居る。この系図から

もなっている。この系図からもさまざまなのが考えられる。まず、第一に資邦は、すべての諸本が、正平十年(北朝文和四年)

(一二三五)二月城州神南の戦で五十一才で戦死したことで一致して

いる。だから延文五年(一三六〇)九月廿五日戦死のこの説は異説で

ある。なお、延文五年は庚子であった。

次に資長(清資)が、明德二年、つまり細川頼之が再度上洛した年に病死していることから、その時彼は病弱で、東讃の守護代候補としては不適任とみなされたのかも知れない。

次に資明であるが、この人は豊後守という注があるのみで、何の記載もない。それでもしや常建では、ないだろうかと考えたが、先にも引用したように、応永二十九年六十一才だったとすれば、貞治元年(一三六二)に生まれたことになり、かりに資邦が延文五年(一三六〇)に死んだとしても資邦の子ではあり得ないことがわかったので、常建はやはり香西氏傍系の人物と考えるを得ないのである。

次に資則死亡の注には錯誤がある。明德は五年で終っているから明

徳十三丁未年はない。

丁未の年ならば応永三十四年(一二二七)

丁丑の年ならば応永五年(一三九七)

癸未の年ならば応永十年(一四〇三)

丙戌の年ならば(一四〇六)

となる。子の元資が、後の応永二十一年(一四一四)の頓證寺法楽和歌会に常建入道に連れられて出席したらしいことと併せ考えるならば、この資則は応永十三年頃四十九才で病死したと考えるのが妥当のようだ。注記に細川讚岐詮春に属してとあるようだから、彼は一生を佐都城ですごしたのであろう。

内藤にせよとは言われなかった。……

とあって、元資がどんなことをしたのかは、はっきりしないが、なぜこんなことが起ったのだろうか。

そもそも丹波の国は、食糧その他、都民生活をまかなう重要地点の一国であったので、南北朝の内乱以来、その守護職をめぐって、支配の争奪がくり返された国であった。そしてその結果、国人衆の発言力も次第に強くなっていった国であった。「明德記」によれば、京都の戦に敗れた山名満幸は、その領国だった丹波・丹後に逃げ帰ったが、それぞれの国人衆の力が強くして追い出され、彼は伯耆の国に逃げのびたと書いてある。

その明德の乱後、丹波の守護になったのが細川頼元であったが、彼は養父頼之の教えを守り、強力な部下（内衆）を守護代とし送り込み丹波の鎮定を計ったのである。それが香西常建だったわけである。国人衆を採用しないで、守護細川家と死生を共にと考えている讃岐人々を採用したのである。

そして常建は、領国の支配機構を整備しながら、次第に国人衆を権力の坐からしりぞけ、讃岐からつれてきた兵力と人材を登用して、治安を安定していったわけである。そしてそのためには、佐料城主の全面的協力が必要だったわけである。彼の後任の丹波守護代が城主直系の元資に、ひきつがれたのもそのためであろう。応永二十九年香西常

建が六十一才で死ぬまで、無事守護代の任をつとめ、頼之の夢想していた理想にこたえたとすれば常建は傑物だったにちがいない。

しかし元資の時代になると、国衆との間は必ずしもうまくゆかないようになってたらしい。正長年間にまきおこった周辺の一揆の影響もあってか、とうとう永享元年（一四二九）三月、丹波国一揆をまきおこしてしまつたようである。

たまたまこの月は、義宣（僧義円）が將軍の宣旨を受けて義教と改名した月であった。一方細川家でもその七月持元が三十一才で卒し、弟持之が相続した時だったので一揆に油をそそぎ、若い香西元資が一揆を鎮圧しようとしてかえって失敗したのであろう。

これで見ると若き日の元資には乱暴な性格があり、それが失政につながったため、常建入道の功績により、香西氏の世襲となりつつあった榮譽ある丹波守護代の要職を水の泡と化したのである。

ところが香西家の史料は、この元資の失敗をすべて抹殺してしまつている。例えば、「南海通記」でも、細川定四[△]臣[▽]記において、

細川右京大夫勝元ハ、……此時香川肥前守元明、香西備後守元資、安富山城守盛長、奈良太郎左衛門尉元安四人ヲ以テ統領ノ臣トス、世人是ヲ細川家ノ四天王ト云フ也。

とあるように香西元資伝はここから始まり、元資の元が細川満元から

賜った元であることも、元資がかって丹波の守護代であったことも伏せているし、同時に丹波守護代豊後守香西常建入道の伝も「南海通記」には見当たらないのである。

また「香西記」の香西氏略系譜の元資の注記にも、

備後守。在京。摂州の渡辺村と河州の植松村を加賜された。細川勝元に従って、勤功軍功をなす。

と書いてあるだけである。

しかし常建入道は、丹波守護代として三十年の間香西氏の栄光を表し、更にその後約十年の間元資がその守護代を受けついでいたのであるから、その間かなり多数の笠居（香西）の兵が丹波に同行されたはずである。その時丹波と笠居とは絶えず水軍によって連携されていたはずである。

香西氏の名を京洛にたかめたこの偉大なる常建入道が死んだ時、その名譽の遺骸は当然笠居郷に葬られたであろう。

下笠居村史では、原荒神社の境内にあった大きな五輪墓を紹介して、南北朝頃から室町時代初期頃のものとして推定している。これは香西城主歴代の墓ではないが、現存する三笠居の五輪塔としては最大である。だから私はこの五輪墓こそ常建入道の墓だろうと考えている。

また原荒神は澳津神社で、水軍の守神であった。またこの荒神さんの北方約三百米の所に、俗に長池と呼んでいる幅十米、長さ百米程の

堀があった。そしてその南側一帯の地を中屋敷といい、また中山城跡とも言っていた。

増田休意の「讃州府志」には、中山城は内間城に属した小城であったとある。中間城は香西元資が、文安・宝徳の頃（一四四四—一四五二）香川郡の物資を京都方面に送るために、飯田川尻に造った内浜屋敷であった。だとすれば、この中屋敷は、常建入道が応永の頃（一三九一—一四二八）、丹波と讃岐をつなぐ屋敷として建てたのではなかっただろうか。そしてここは生島水軍を中心にした彼の活動拠点であり、佐料城と丹波の屋敷との関係においての中屋敷であった。常建の死後、それをうけて元資も、生島水軍利用の拠点としてこの中屋敷を使用していたのであろう。それで上香西は上方方面との連絡のために、この中屋敷と内浜屋敷を利用したので、「讃州府志」の「中山城は小城で、中間城の属城だ」という伝唱も生まれてきたのではなからうか。

だとすると、抹殺されたはずの常建の墓とその中屋敷とが、常建の名を呼び続けていたことになりはしないか。

高松短期大学研究紀要

第 13 号

昭和58年3月1日印刷

昭和58年3月10日発行

編集発行 高松短期大学

〒761-01 高松市春日町960

TEL (0878)41-3255

印刷 高東印刷株式会社

高松市東山崎町596番地